

12月



あの日のあの川 リレー日記 ～第65話～

あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第65話主人公 坂井友亮

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：茨城県破竹川)

「思い出」

いつのこと？： 学生時代

どこの川？： 茨城県破竹川

こんにちは。白川研究室の坂井友亮です。私の地元の茨城県南部には破竹川という小さな川があり、ブラックバスがよく釣れることで有名で週末には他県などからも多くの方が釣りにやってきました。私の祖父母の家はこの破竹川に面しており、幼少期には私は毎日のように祖父母の家を訪れていたことから、川は幼少期の私にとって当たり前の光景でした。そのため私の破竹川での思い出は遠足やイベントのような非日常の体験はほとんどありません。今回はそんな多くの何気ない日常の体験の中でも比較的非常日常だった思い出について書かせていただきます。

私が幼稚園生の時は 2 つ上と 2 つ下のいとこ達と 1 つ上の姉の 4 人で、祖父母の家でよく遊んでいました。川が家の前にあると聞くと川での水遊びなどを想像しますが、破竹川は水質が悪く川底も見えないため川で水遊びをする人は誰ひとりとしていませんでした。その代わりといっはなんですけど堤防の上を平均台代わりに歩いたり花火をしたりして遊んでいました。そうした幼稚園生時代で特に印象的なのが橋を架けたことです。橋といっても川幅 5m 以上はある破竹川にはありません。破竹川から分岐している幅 50 cm 程度の農業用の用水路に橋を架けました。破竹川の周辺には水田が広がっていて、水田に利用する用水路などもたくさんあります。私たちはそれらの用水路を飛び越えたりしながら走り回っていたのですが、2 歳年下のいとこはまだ小さく用水路を飛び越えることが出来なかったため、橋を架けて渡れるようにしようということになりました。私たちは体重を支えることができる丈夫そうな竹を拾い集めせせと運び、それらを用水路に架けました。今振り返るとただ竹を並べただけですが、小学生から幼稚園生の当時の 4 人にとっては一大プロジェクトであり、完成の際には非常に大きな達成感を感じたのを覚えています。架けられた橋は 4 人の名前の頭文字から「とひゆま橋」と名付けられました（その後私に弟ができて橋の名前は「とひゆまし橋」に改名されました）。私が中学生の時にその橋を見に行った時にはまだ橋はありましたが、今はどうなっているのかわかりません。

小学生になってからの思い出で最も記憶にあるのは、祖父母の家がある集落で火事があったときです。臨場感が出るようにと文体を変えましたがご容赦ください。

ある日、小学生になった私は母親と一緒に祖父母宅に向かっていた。祖父母宅がある集落に近づくにつれ黒い煙が上がっているのに気が付きました。どうやら集落の端の空き地でボヤになっていて、高校生らしき人が一人で消火しているようでした。祖父母宅に着くやいなや私はバケツを手に取り水道から水をくみ、急いでボヤがあった場所に向かいました。現場までは 200m ほどでしたが水をいっぱいにくんだバケツを持つ小学生の私の足取りはとてつもなく遅く、到着までに 10 分以上かかったように思われます。到着したところにはバケツの水は歩くときの衝撃で半分ほどがこぼれており、さらにバケツを持つ手は重みでとても痛く泣きそうでした。そんな泣きべそ状態で到着した私の目に飛び込んできたのは驚きの光景でした。なんと大人たちが川からバケツで水をすくい取り、そのままバケツリレーで火元まで運び消火していたのです。私が祖父母宅から水が入ったバケツを運んでいる間に、ボヤを目撃した私の母が集落中に連絡し、住民が一丸となって消火にあたっていたのです。こんなにも苦労して水を運んできた私はなんだったのかと子供ながらに絶望しました。その後消防車が到着して火は消し止められ、幸いなことに火事による目立った被害はありませんでした。消火の際には住民も消防車も川の水を利用して、「火事の際に川がもつ役割」という点において火災訓練などでは決して得られることのできない大きな学びを得ることができました。余談になりますが、私たちが最初にボヤを目撃したとき、ボヤがかなり大きくなってもお高校生らしき人が一人で消火しようとしていたのは、出火の原因がその高校生が火遊びをしてそれが燃え広がったことだったため周りに助けを求めにくかったからだそうです。皆さん火遊びには注意しましょうね。

中学・高校と祖父母宅を訪れる機会は減りましたが、大学生になったいまでは農家である祖父母の田植えや稲刈りの手伝いをしに行くことが多々あり、破竹川の新たな面に気づくことが出来ました。4 月下旬から 5 月上旬の田植えの時期になると破竹川の水が水田に引かれるため水位は大幅に低下することから、「利水」としての破竹川の役割を強く意識するようになりました。また 1 年ほど前には集落に最大浸水深が示されたパネルも設置され住民や行政の水害に対する防災意識の高まりを肌で感じています。

このように過去の記憶を掘り起こすと同じ破竹川についても、自身の成長とともに破竹川へのイメージが「遊び場」から「利水」や「水害」へと変化しているのだなと考えを整理することが出来ました。この日記は破竹川だけでなくそのほかの身近な川についても見つめなおす貴重な機会になりました。

最後に上の写真は今年の田植えの時期に破竹川周辺の水田でとった不思議な形をした雲の写真です。

最後までお読みいただきありがとうございました。

(次は熊谷陽人さんにバトンを託します)